

北京・ワシントン・モスクワへの旅

聞き手・「文芸春秋」編集部

昭和四七年九月、北京で日中国交正常化を実現した一カ月後に、その意味合いの説明などで米ソを訪問した際の感触を述べつつ、大平自主外交の哲学を語る。

欧米の疑惑をとく

北京に赴いて日中の国交を樹立してから一カ月とたたぬうちに、ワシントン・モスクワを歴訪してこられたわけですが、これはやはり、日中復交をやりっ放してはいけない、米ソに対して至急説明が必要だったということでしょうか。

平和というものは、たんに戦争のない状態だ、と簡単に考えることはできないと思うんですよ。絶えざる努力がなければ「平和」という状態は維持できない。つまり一国の政治・外交の動きが、他の国々で理解されていないと、「あの国はあんなことをしてるけど、どっとうわけなんだろう」とみんなが不安を持ったり、疑心暗鬼になったりというんではきわめて不穏な話ですからね。われわれとして

は、日本がやっておりますことは、こういうものでございます、ウラもオモテもございせん、ということができるだけ多くの国々に理解してもらつたよう、努力を怠つてはならないと思つてんです。

こんど、日本と中国の間で戦後二十年余にわたつて閉ざされていた道を開いてきたわけですが、これは世界にとつてたいへん大きな事件だつたと思ひます。八億の民とあれだけの広さをもつた国、そして一億の非常にすぐれた活力をもつた日本民族とが、背中あわせだつたところから挨拶をかわず仲になつた。これはどういふことになるだろう、と世界全体が注目もし、やはり心配もしておつたことだと思つてんです。だから僕は、できるだけ早い機会に僕自身が直接行つて、真意はここにあるんだということだけは、ほかの国々に伝えておかんならんと考えておつたんですよ。

八億の人口プラス日本の工業力、そこに不安の根があるわけでしょうが、その上に白人のもつ黄色人種への潜在的な違和感・恐怖もからんではいませぬか。

そういう『黄禍論』めいた議論は、こんどの旅ではどこからも聞かなかつたですが、ただ、こういうことはありますね。現実には中国と日本は遠い国です。意外に日本人は中国人を知らないし、中国人もまた日本人を知らない。そういう状態であるにもかかわらず、欧米人から見るとなにか兩國が非常に近いものに見えるんですね。われわれの目に、ヨーロッパとアメリカがひどく近く見えるのと同じことですが、だからそこになにか自分たちの知らないことが、兩國の間でもくろまれていやしないか、と危惧をもつ。僕はそれは不思議じゃないと思つたな。だからこそ、よく説明してわかつてもらわねばならんわけです。

その場合、やはり大変な努力が必要だということはこんども痛感しましたね。たとえばアメリカと欧州諸国の関係。血は水よりも濃しで、皮膚の色から言葉、風俗・習慣からもの考え方までよく似

ていますよね。だからかりにアメリカとヨーロッパの間にあつれきが生じて、いざとなると理解は早い。その点、日本はそうはいきません。アメリカと欧州の間が一の努力ですむことであれば、われわれには二の努力が要る。対米外交にしてもヨーロッパに倍する努力が必要です。それは覚悟しておかなきゃいかん。

日中の中で「何かもくろまれてはいないか」という懸念ですが、この点、ソ連での感触はいかがでしたか。

これは相当に強いものがありましたねえ。しかしそれは、こちらにいわせれば思いますことというもので、ソ連の首脳にはしからざるゆえんをよく説明しておきましたかね。しかし、説明だけでは足りないんだ、ホントは。やはり具体的な行動で、僕らが日中関係を処理してゆく過程を通じて、わかってもらうほかはない。

声明は第三国に向けたものではない

中国と対立関係にあるソ連としては、日本の出方が気になるところでしょうね。外相の訪ソ中も、グロムイコ外相とコスイギン首相がともに「日ソ関係は両国間だけで解決されるべきであり、第三国が影響を与えることには反対である」と強調しているのを見ても、ソ連側がいかに日中の「結合」に警戒心を抱いているかがわかる。多極外交に入った日本の前途のけわしさが現われてくるように思いましたね。

コスイギン首相の言葉も、やはり危惧の念をそういう形で現わしたわけですね。だけど、第三国が

影響を与えるようであつてはならんのは、こりゃ当り前じゃないかと僕はいうんだ。日ソ關係は日ソでやるんだし、日米關係は日米、日中關係は日中が両国だけでやるもので、第三国のそのおかしでやるもんじやない。

ソ連だつてもともと、国と国との間には正常な關係があつてしかるべきもの、日中の国交正常化など当り前のことだつたのに、とつねづねいつておつた。だから国交を開くこと自体に懸念を表明しているわけじゃないんです。ただソ連が心配するのは、日本と中国とが『第三国に向かつて』結合しちやうことに対してですね。その懸念ははっきりと持っている。だからね、そうだろつことはちゃんと予想して、日中共同声明でもいつとるでしよう。第三国に向けたものではない、第三国の利益をこねることを考えたものでは決してないといつたつてますよ。そこをわかつてもらいたい。

しかし、言葉の上ではそういった懸念は払ってきたつもりですが、これを事實をもって裏付けせんならんのが、これからの仕事ですよ。日本は「正直な外交」というか、誠実な、公明な外交をしていかねばならないと思います。すでにわれわれは軍事力を放棄している。軍事国家として國際關係を力で押し通すことを断念した国なんですから、どうしても手間はかかるけれども、丹念に誠実にやつていくことですよ。そうすれば理解してくれるんじゃないか。

こつ事實で裏付けるかの問題になりますよ、共同声明第七項で、日中復交は「第三国に対するものではない」といつていても、國際政治の力学として、それですむかどうか。たとえばことしの一月にグロムニコ外相が来日したのにも、日中接近を牽制する狙いがあったらうし、周恩来首相のいつた「こつです、茅台酒はウォッカよりいいでしょう」といつさりげない言葉も、対ソ外交を手控えてくれといふ意味にきこえなくもない。そういう力学の中で、日本がいや応なくコミットさせられる部分が

あるのではないか。つまり経済交流が結果的に一国の軍事力増強に貢献するといった形が注目を受けるわけで……。

中ソ対立という問題は、あくまで中ソの問題ですから、日本はとやかくいうべき性質のものでもなし、あずかり知らない。……ただ、おっしゃるように今の世界は、直接的な軍事力以外の、たとえば経済力、情報力、あるいは技術力といったものが、目に見えない戦いを演じておることは事実ですからね。そういう世界においての日本の行動、そしてその責任については、よほど気をつけておかないとあらぬ誤解を招きやしないか。

たとえば日本人は「エコノミック・アニマル」だ「イエロー・モンキー」だといわれますね。わたしは日本人というのは必ずしもそんなに経済的民族だとは思いませんけれども、世界はそう見る。この、世界の目にそう映るマナーというものについては、よほど熟慮してフェアな競争に焼き直していくよう努力しませんとね。それも外交的努力の一つの局面であることと思います。

しかしそれは外交とひと口にいつても、政府ばかりの仕事じゃなくて、いろいろな階層で展開されている一つの交際のあり方ですからね。財界といわず、学界・言論界といわず、それぞれに考えてもらわにゃいかんことで、ひとり政府だけの問題ではないですがね。ひろく、誤解を招かないような配慮が必要でしょう。

主体的な判断力を

具体的な問題として、たとえばソ連のチュメニ油田の開発に協力すると、これはソ連極東海軍

の増強につながる。逆に中国にプラントなどの経済協力をすると、こちらの軍事力を強化することになる。そういう構造にいやが応でも日本が組み込まれるという見方もありますがね。

そういうことまで心配しておいたら際限がないんでね。経済の交流は「互惠平等」の基礎の上でなら、どこの国とやってもさしつかえないじゃないか。日本とアメリカの間もそうだし、日本と中国、日本とソ連との間でもそうなんでしてね。それが結果において軍事力にどのような関係をもつてくるか、それは分析すれば関係ないとはいえんけど、軍事力に関係してくるから困るということになると、世界経済の交流が萎縮してしまいますからね。そこまで考えんでもいいじゃないか。

ただ、それを軍事力に転化し、転化された軍事力を行使するかどうか、そこはその国の判断にかかると問題ですから、経済力をもてば必ずそれは軍事力になり、軍事力をもてば必ず平和を乱す力になるゾ、なんていうことになるよ、その国の主体的な判断の無力さを暴露するんでね。そういう推論は僕は妥当じゃないと思いますよ。

周恩来首相の茅台酒の話でもね、問題はその受け取り方ですわ。われわれは自主的判断で日中関係を切り盛りしてゆくと、対米関係もとのえ、日ソ関係も軌道にのせていくわけで、一種の被害妄想狂にならんことですよ、日本全体がね。われわれが自主的にやることなのに、ちよっと日本人は神経質になりすぎるんじゃないの。つまり、経済力が軍事力になるといった話でも、そんなこといいよつたら自主的な政策の規制力というのがないじゃないの。人間ちゆうのは判断し、行動してその責任を負うわけでね、きちんとした判断をいつも心がけておればいいわけなんだ。そこを見ないのは、たとえば日中が国交を回復すると共産主義的な宣伝・運動が苛烈になって、共産化されるおそれがあるという論理と同じで、それじゃ日本の国民はお人形だつてことになつちゃうんじゃないかな。

われわれはそういう場合にいつも、これでいいか悪いか判断する立場にある。これは骨であるか身であるか、臓物であるか皮であるか判断して、骨や臓物を捨てたらいいんじゃないでしょうか。そういう主体的な判断力・選択力がどっかにいってしまつて、ひと事のようなこといつてるのはいかんと思つよ。

そうはいつても、日本人はちゃんと分別を發揮していると思います。国内だつて、日本にはいろんな思想があり、運動があつて、憲法はそれを気ままにやらせているわけだ。それでも日本人はどれが身でどれが骨か、判断しているじゃないの。これからの外交も判断力さえ養つていけばいい。これは民族の榮養として摂取しよう、これは日本民族の役に立たんから捨てちやおう、と日本人は過去の歴史をみてもずっとやってきたじゃないですか。われわれはそういう意味の民族的な自信を持たなきゃいけないと思つよ。

自主的判断というお話がでしたが、それは外交の多極化をも意味するわけですね。戦後日本の外交は日米同盟という一本のラインにしぼってきた。対米政策イコール世界政策だったんですが、そこから今度は中国やソ連の扉をも一人で叩いてまわる。多極外交すなわち自主外交ということになりますね。

それはね、日本はアメリカと戦つて敗れ、占領されて、アメリカの援助で復興にとりかかつて、終戦このかた日本人はいかにして生きるかということに専念してきたわけですね。いわば世界の政治がどっちへ行くかの問題より、とにかくまず食つことだった。国際政治はアメリカさんに任せておけばいいという、つまりアメリカ依存だったんですね。しかし、いまの日本はもうそんな段階を脱却したと思つますよ。で、いまやり始めてる形が実は当り前なんじゃない？ 政治の問題も経済の問題も、

日本人の分別で処理する。なにも新しいことを始めたわけじゃない、いままでが変則だったんで、当り前の姿になったというだけのことですよ。

自分の寸法に合ったことを

その「当り前のこと」がアメリカでどう受けとめられたかという点ですが、ロジャー・ス國務長官は「現在の世界の平和は力の均衡の上にもたらされたもので、実のある緊張緩和は力の背景があつてはじめてできるのだ」といつている。どうも、日中復交も日米安保あつたればこそと示唆しているようですが。

日中国交正常化ができたゆえんのもは、日本の力ですよ。日ソ関係が着実に進展しておるのも、やっぱり日本のもつてゐる力です。われわれは自信をもつていいと思ひますね。こんどアメリカを訪問してみても、へつに抵抗はありませんでしたよ。それより日中の国交正常化が日米関係にとってプラスしたと思うんだ。

日米関係に厚みというか、広がりをもたせてくるんじゃないでしょうか。パートナーとはそういうものでしょう。相手の庭先だけでおとなしくしているのがパートナーなんじゃなくて、いろいろのことを自主的にやるが、その結果として相手を利用する。それが本当のパートナーじゃないだろうか。

むろんそうですね。ただ、アメリカにはアメリカの国際政治を見る眼がある。ニクソン大統領が「ビッグ・ゲームだけに気をとられてはならない」といつたそうですが、アメリカの考えるアジア集団安全保障からすると、日本が「中華人民共和国政府が中国の唯一の合法政府であること

を承認する」といったのは、アメリカが「上海コミュニケ」でいかなかったことだけに、もし

や、弟分よ、一歩先を急ぎすぎるぞ」と考えやしなかったか。そのへんのご印象はいかがですか。それはまったく余計なことじゃないでしょうか。日本が判断を下すことだもの。そりゃひと口にアメリカ人といつてもいろんな人がいるから、そういう考えを持つてる者もいるでしょう。また、日本の姿勢はきわめて当然だという者もおりましよう。そんな遠慮をすることはないよ。アメリカの鼻息をうかがう必要はひとつもない。もうそこまで日本はきているんです。先方だって、鼻息ばかりうかがってるパートナーじゃ、頼りにならんと思っくんじゃないの。だから活眼の持主はアメリカでもよく理解していると思いますよ。

日本はげんに、台湾は中華人民共和国の領土であるとはいってないんだよ。中国に帰属すべき領土であるというだけです。いままでとちつとも変らないんで、外交関係を北京に移したというにすぎないわけです。わたしのほうは安保条約は堅持してあるので、それはアメリカにも以前から、ハワイ会談でも伝えてある。

こうして外相がごく短期間のうちに各国の最高首脳と会談が持てたというのも、日本が「政治大国」化した徴しちくのようですが、さいごに今後の日本の外交のあり方をうかがいたい。

出かけていっても粗末には扱われなただけの国になりましたね。ニクソン氏も繰り返し言うておられましたよ、「世界各国の首脳と会ってみると、日本に対する評価は非常に高い」とね。これは外交辞令だけじゃないですね。実感としてそう見てると思うな。北京もモスクワも、ワシントンもたいへん日本を重視してますよ。日本の力を、日本人が考えてる以上に評価している。従って日本も、その力量に相当した分別と責任ある仕事を、国際的にやらねばならんです。地球上、いかなる国とも付き

合いをしなければならぬ国になりましてね、日本も。極東の区域だけで何かうまいことしようなどという考えが通用しない時代になつたんです。経済が大きくなればなるほど、外交的努力もそれにふさわしいものにならねえかん。

こんど回つた国々はそれぞれ立派です。ちゃんとした原則をふまえて、自主的判断で誇り高くやつてますわな。日本も外交評論ばかりやつとつては困るんですね、国連の場でも参加責任を果たしていい。これはやるが、あれはゴメンだなんてことではいけないんです。経済協力にしても、方策をもてあそんでいないで、世界がみてナルホド日本のやることはちゃんとしておると評価されるようでないや。要は自分の寸法に合つたことをやる。寸法以下じゃ困るよ。